

日本の植民統治の記憶 —近年のアジア系アメリカ文学にみる傾向

Memory of the Period of Japanese Colonial Rule —A Recent Trend of Asian American Literature

河原崎 やす子
KAWARASAKI, Yasuko

1. 戦争の記憶と日本植民統治

戦争¹の体験とはどのような形で記憶として引き継がれていくのだろうか。2015年は第二次世界大戦終結から70年という節目で、日本では戦争を体験した世代の高齢化と記憶の風化がこれからの問題だと論じられた。言い換えると、戦後生まれの世代がマジョリティを占める中でどう戦争の記憶を継承するかということである²。当然これは日本ばかりではなく、戦争と関わった多くの国々が共通に抱える問題でもある。戦争の記憶は、時に薄らぎ、あるいはゆがめられたり過大視される。また日本の場合、戦争に関しては加害と被害の双方の立場が考えられるが、圧倒的に記録も記憶も自国の国民と国土の被害に偏っていることが明らかにされている³。その一方で、日本が侵略した国々では、戦争は被害の記憶としてしっかりと残っている。この不均等はある意味で、南京事件や慰安婦問題をめぐる昨今の日中や日韓の政治問題を引き起こしたといえよう。

こうした記憶の偏りに関して、ヴェトナム系アメリカ人のディン・Q・レ (Dinh Q Lê) は鋭い指摘をしている。彼は10歳の時に祖国ヴェトナムから難民としてアメリカに渡ったアーティストだが、在学したアメリカの大学でヴェトナム関連の授業を受けた時、圧倒的に米国視点の談話が退役軍人たちによってされ、嫌悪感を抱かずにはいられなかったと述懐している⁴。これに対する手段として、彼はアメリカ側の被害よりもはるかにヴェトナム側の被害が大きいことを学内外にアピールし回ったという。彼によると、アメリカにおけるヴェトナムの記憶はアメリカ側のフィクション、ことにハリウッド製作の映像に占領されているのが現状で、ヴェトナム人の真の姿は不可視になっている。彼は、こうした一方的視点を押し付けることは避けるべきであり、人々の多様な視点や本音を拾い上げることで初めて多様な歴史を紡ぐことが出来ると考え、アートの分野からその作業を試みている。彼の指摘するこのアメリカの問題は、まさに先に述べたとおり日本の問題でもある。日本にハリウッドはないとはいえ、戦争被害を与えた国や国民への眼差しの欠如という点では共通している。

そこで考えたいのは、戦争の記憶とその再生が当事者、ことに被害側にどのような意味をもつかということである。かつて日本が侵略したアジアや太平洋の島の地域における日本の侵略の記憶は、日本人がすでに忘却し、あるいは思い起こしたくないと思っている過去に当たる。それゆえ現在までその記憶を再生する作業は、主に侵略を受けた側の人々、ことに歴史家や作家が担っ

ている。テッサ・モーリス＝スズキ (Tessa Morris-Suzuki) は、過去とはそれを解釈して知的理解をする面と、過去との一体化をすることで共感を持つという面とがあるとす⁵。後者に関して歴史小説も含めたメディアは重要な意味を持つが、それは過去を説明しさらにその喜びと恐怖をも回顧し、読者の想像力を過去に投げ入れて過去と現代の世代間に一体感を形成するからだ。また、歴史の責任という点では後の世代でも過去とは深く結び付かざるを得ず、歴史と向き合っで現在と過去の連携をすることで現在の自己定義が可能になるとしている。ここには、過去の記憶を再生することの意味と意義が明らかにされている。さらに、マリタ・スターケン (Marita Sturken) が提唱するのは、国家にとって重大な出来事を大衆が記憶し語ることは「文化的再演」であり、それが癒しにつながるということである⁶。歴史、ことに負の歴史の記憶を再生するとはこうした意味を持つわけであり、太平洋戦争体験を直接持つ世代が減少する今もなお、被害の記憶の再生が盛んに行われている根拠をこの論は明快に解明する。

戦争の記憶とは個人的、社会的、国家的、国際的というあらゆるレベルを考えるべきであり、周縁化されまた埋もれて欠落している記憶にとりわけ注目すべきであるという提唱は、すでに10年以上前からされている⁷。21世紀になって、こうした歴史記憶を掘り起こす作業は学際的に研究され行われており、歴史のいわば見直しの作業についての論議も盛んになってきている⁸。アジア太平洋における戦争の記憶は複層的な権力関係を視野に入れる必要があり、さらにまた同じ歴史項目でも地域によって違う重みを持つということもあって、その方法は多様にならざるを得ない。脱植民への潮流やナショナリズムの高揚、また冷戦終結という歴史が、単純な思考を阻む要素となるからである。今後、太平洋戦争における日本の植民統治に関する記憶は、これまでに以上に欠落事柄を補うあるいは見出す作業が進むことが予期できる。

この作業の一環として、本論は日本統治関連の記憶がアジア系アメリカ文学ではどう表現されているか、その傾向の分析を試みる。アジアにおける被害の記憶ならばまずはアジアの文学を考察すべきであろうが、この戦争がアジア太平洋地域における覇権をめぐる争いであったという歴史背景と、戦後続くポストコロニアル状況下で多くのアジア人がアメリカへ移民したことを考慮すると、アジア系移民のアメリカからの発言には目を向ける必然性がある。加えて、英語で発信される文学はグローバルマーケットにおいて大きな比重を占めており、この状況が世界の幅広い読者に訴えかける結果を生じていることも考慮すべきだからである。

2. 環太平洋の枠組み概念とアジア系アメリカ文学

太平洋戦争における日本の植民統治を論じるに当たって、まずその統治の及んだ地域を考えた。戦時中の日本による統治はアジア太平洋地域に広く及び、中国、韓国、台湾はもとよりフィリピン、シンガポール、マレーシアなどと、グアムやサイパンなどの南太平洋の島々まで広がっている。この広範な地域に対しては、「環太平洋」(Transpacific) という斬新な地域概念を当てはめるのがふさわしい。この「環太平洋」は言葉としては以前から存在するが、アジア系アメリカ研究およびアメリカ研究分野において近年浮上した、いわば21世紀における新たな地域概念である。翻ってみると、20世紀には越境すなわちトランスナショナリズム (Transnationalism) が歴史や文化を分析する際に新たな重要な概念として華々しく登場し、50年以上アメリカを論じる際の有効な論理となった。これはアジア系アメリカ文学に関する批評界においても、広く深く論考に用いられてきた⁹。しかしこの概念は、国境を越えるというリベラルな考えである一方で、アメリカ中心の理解であり世界観であるという批判がアジア系の学者からされた。それが

環太平洋研究を新たな枠組みとして提唱した2014年出版の論文集『環太平洋研究』(*Transpacific Studies: Framing an Emerging Field*)¹⁰であり、ヴェト・グエン (Viet Thanh Nguyen) とジャネット・ホスキンス (Janet Hoskins) は序論で次のように越境概念の問題点を指摘した上で、環太平洋研究という概念を理論付ける。「越境」はじつはアメリカ中心の世界観でアメリカへの移民やその出身地を植民化するリスクをはらむ考えであり、アメリカの優越とオリエンタリズムがその根底にある。これに対して環太平洋の枠組みでは、過去および現在のアメリカの軍事的政治的あるいは経済的支配への野心を暴露できる。この地域をずっと支配したのは欧米列強や日本の抱いた帝国主義への野心の複雑な交錯であり、これは現在のアジアとそのディアスポラに対する地理的、経済的、政治的な覇権への野心につながるものである。言い換えると、環太平洋の枠組み概念がアジア系アメリカ研究とアメリカ研究の分野に包括的な概念としてきわめて有効だといえるのは、この地域が20世紀に日本、アメリカ、中国、ヴェトナムが支配、介入、影響をした場であって、21世紀の現在も経済面を中心に同様の動きを示す場でもあるからである。

アメリカ文学者ユンテ・ホアン (Yunte Hung) も、こうした新たな研究のパラダイムと同様な思考を、「環太平洋的想像力」と名付けている¹¹。中国からの移民研究者であるホアンは、アジア系アメリカ文学の文脈ではなくアメリカ文学の系譜にこの概念を当てはめる。すなわちメルヴィル (Herman Melvil) の『白鯨』(*Moby Dick*) を太平洋の帝国としてのアメリカを描くものではなく、文学的歴史的想像力を用いて地理的政治的な圧力のもとに生じた太平洋での遭遇という一連の事件を描いたものと捉え、これこそ環太平洋的想像力を示すものとする。このように、ホアンは文学表現と歴史知識を環太平洋という地域に関連付ける可能性を追求し、歴史と文学はいわば黄昏のような地帯で四つに組むと同時にお互いを避けようとする状況にあると考える。だからこそ環太平洋の想像力はアメリカの覇権を退けるまったく新たな思考となるというわけである。

筆者はかつて、アラン・イサーク (Alan Issac) の提唱した「回帰線」アメリカ文学概念に依拠して、フィリピンやグアムの文学の分析を試みた¹³。この際に重視したのはスペインとアメリカによる植民という共通体験であり、被植民者としてのポストコロニアル状況への問題意識や想像力の共通性である。これは分析視点としては斬新かつ有効であったが、研究過程で日本による侵略統治に分析の関心が移行していった。そして日本の植民統治に関しては東アジア地域も重要な位置を占めることから、キューバやプエルトリコなどを含む枠組みの「回帰線」は当てはまらず、環太平洋の枠組み概念こそがふさわしいと考えた。つまりアジアにおけるコロニアリズムとポストコロニアリズムを文学面から論じるにあたって、スペイン、アメリカ、日本ばかりか英国、フランス、ドイツなどの支配や侵略を大きな環太平洋という枠組みで行う研究でこそ、この地域の横断的な文学分析が可能となるのである。具体的には、日本の植民統治が文学に如何に表現されているかという課題を環太平洋という地域枠組みで考察することで、共通の意識や想像力および表現という傾向などを見出せると考えられる。

3. アジア系アメリカ文学と戦争の記憶

アジア系アメリカ文学は長年、ステレオタイプやアメリカへの同化とアイデンティティ、家族やコミュニティといったアメリカにおける移民問題を主要テーマにしてきた¹⁴。これらは他の地域からの移民にも共通する問題として共感を得、アジア系をアメリカ文学の主要ジャンルにまで押し上げてきたと言える。しかし次第にアジアの出身国を描く作品も多くなり、たとえばジェシ

カ・ヘゲドン (Jessica Hagedorn) の『ドッグ・イーターズ』(*The Dogeaters*, 1987) は全米図書賞の候補となったが、当時はフィリピンを舞台とするこの作品がはたしてアメリカ文学と言えるのかどうかという論議がされたほどである。しかしその後、ジュンパ・ラヒリ (Jumpa Lahiri) とハ・ジン (Ha Jin) がそれぞれピューリッツァ賞と全米図書賞を受賞した 1999 年には、ジン作品が中国を舞台にしていたことなど全く問題にならなかった。

その延長上にあるともいえるが、近年のアジア系アメリカ文学にはアジアにおける日本侵略の歴史を取り上げる作品が散見される。従来の中国や韓国、ヴェトナムなどに加えて、グアムやシンガポール、マレーシアなどからの米国への移民が戦争の記憶を文学として続々と発表しており、その作者には戦後生まれのきわめて若い世代までが含まれる。これまでアジア系の戦争関連の作品といえば、主にアメリカが関わったアジアにおける戦争を取り上げる傾向だったのに対し、近年、作家の出身国における日本の植民統治に目を向けたものが多くなっていることは注目に値する。これはなぜなのか。考えてみればアジア系アメリカ人とは、アジアからの移民が主流アメリカの抑圧に対抗するために手を組んだ民族集団であって、出身国の歴史や文化は実に多様なわけである。その歴史を顧みると日本に侵略統治され被害を受けた地域は非常に多いが、それが日本をルーツとする日系人と手を組み統一集団を形成したのである。アメリカにおけるアジア移民抑圧への対抗という事にその目的があったからだ。さらに日系アメリカ人は強制収容体験とその後の補償運動や確立された高い社会的地位などから、抑圧と成功のシンボルとなって、アジア系においては重要な位置を占めていた。こうしたことは、これまで日本の侵略がテーマとしてあまり浮上しなかった要因と考えられる。しかし露骨な差別が沈静化し生活もある程度安定したアジア系の人々が、ようやく過去を振り返って記憶によって故国の再定義を試みようとしているのがこの動向だと解釈できるのではないか。

それではアジア系アメリカ文学において、日本侵略を取り上げた作品の作家がどのような陣容になるのかを代表作と生年から概観してみたい。以下の表は、筆者が注目し、すでに論評をしたかあるいは今後取り上げる予定の作家とその作品を一覧にまとめたものである。これはあくまでも日本の侵略統治という歴史項目をめぐる作品という観点から作成したものであり、見落としも含めてすべてを網羅したとはいえず、今後も改変を加える予定である。

日本侵略を扱うアジア系アメリカ文学一覧

作家名	生年	作品名
中国系		
マキシム・キングストン Maxine Hong Kingston	1940 ~	<i>The Woman Warrior</i>
ウイン・テク・ラム Wing Tek Lum	1946 ~	<i>The Nanjing Massacre: Poems</i>
エイミ・タン Amy Tan	1952 ~	<i>Kitchen God's Wife</i>
ハ・ジン Ha Jin	1956 ~	<i>Nanjing Requiem</i>
韓国系		
リチャード・キム Richard Kim	1932-2009	<i>Lost Names: Scenes from a Korean Boyhood</i>
テレーゼ・パーク Therese Park	1940s? ~	<i>A Gift of the Emperor</i>
テレサ・ハッキョンチャ Theresa HakKyung Cha	1951 ~ 1982	<i>Dictée</i>

チャンネ・リー Chang-rae Lee	1965 ~	<i>A Gesture Life</i>
ノラ・オッジャ・ケラー Nora Okja Keller,	1965 ~	<i>Comfort Women</i>
スーザン・チョイ Susan Choi	1969 ~	<i>The Foreign Student</i>
エイミ・タン Amy Tan	1952 ~	<i>Kitchen God's Wife</i>
フィリピン系		
ジェシカ・ヘゲドゥン Jessica Hagedorn	1949 ~	<i>Dogeaters</i>
ニノチカ・ロスカ Ninotchka Rosca	1946 ~	<i>State of War</i>
セシリア・ブレナード Cecilia M. Brainard	1947 ~	<i>When the Goddess Wept</i>
テス・ウリザ・ホルス Tess Uriza Holthe	1966 ~	<i>When the Elephants Dance</i>
ザモラ・リンマーク Zamora Linmark	1968 ~	<i>Leche</i>
ミゲル・シフーコ Miguel Syjuco	1976 ~	<i>Ilustrado</i>
香港系		
ジャニス・リー Janice Y. K. Lee	1970s? ~	<i>The Piano Teacher</i>
シンガポール系		
サンディ・タン Sandi Tan	1972 ~	<i>The Black Isle</i>
チャモロ (グアム) 系		
ペレス・ハワード Peres Howard	1940 ~	<i>Mariquita</i>
タニヤ・タイマングロ Tanya Taimanglo	1972 ~	<i>Attitude 13</i>
クレイグ・ペレス Craig S Perez	1960s or 70s ~	<i>From UNINCORPORATED TERRITORY</i>

(2016年までに出版された作品をもとに筆者作成)

この一覧には、すでに広く認知されアジア系を代表する作家から、新しい世代の表現者として注目を浴びている者やまだ知名度はそれほどではない者まで多様な作家の名前を挙げた。このように日本の侵略統治に何らかの形で関わっているという共通項から見ると、これらの作家はまさに環太平洋の枠組みで論ずることが可能な陣容である。さらに世代に関する注目点も浮上してくる。ここに挙げた大多数の作家は戦後生まれだが、その中で40年代～50年代生まれの作家とそれ以降の作家の間に明らかな作風の相違がみられるのである。前者は移民1世か子ども時代に移民した1.5世が主力で、後者はアメリカ生まれの2世以降である。当然、戦争の記憶が体験としてあるかどうかも世代で異なっている。また、アジア系の移民が1965年の移民法改正以降に急増したことを考えると、その新たな波もこの傾向と関連していると思われる。その違いとは日本侵略統治の取り上げ方であり、世代によって文学表現が異なるという大まかな傾向が見えてくる。少なくとも筆者が現在までに分析した限りにおいて、上記40年代から50年代生まれの作家は、日本侵略を正面から取り上げてテーマに絡める傾向にある。たとえばアジア系を代表する中国系のマキシム・キングストンやエイミ・タンは、表記した作品において日本侵略を主人公への抑圧の象徴として告発のトーンを加味しつつ描き出している。それがウィンテック・ラムやハ・ジンの

手にかかるとより具体的な日本侵略の象徴ともいえる南京事件に集中して、個人や社会の抑圧を象徴したものとして強く告発している。韓国系でもテレサ・ハッキョンチャやテレーゼ・パークが日本の植民地主義を告発している。いずれも、日本への非難や恨みという感情がストレートに表現される傾向がみられる。

ところが60年代以降の作家になると、より込み入った形での日本植民統治の告発をしたり、告発とまではいかずに歴史の記憶をたぐりよせ読者に評価をゆだねるといった手法を取ったりする。それを端的に示しているのが、70年代生まれのシフコフの作品『イラストラード』である。これはポストモダンの手法を用いた緻密な構成の作品だが、その中で日本侵略はいわば側面から批判する形で描かれる¹⁵。取り上げられる歴史は、フィリピンでの最も悲惨な事件と言われるマニラ最終戦を中心としたマニラにおける日本の侵略統治の全貌だが、それが断片的な記憶としてスペインやアメリカの植民とともに語られる。この手法を通じて、記憶を通して語ることで歴史事実の曖昧さを示し、歴史の断片から読者に再構成させるという意図が示される。これは歴史記憶に関するひとつの見解であり、歴史は語られるものではなく、読者も関わって記憶から構築するものとして示されているわけだ。このような形が、アプローチは違うとはいえ、ウリザ・ホルスやサンディ・タンにも見られる。これは上記の表に挙げた作品中10以上を詳細に分析して得た筆者の見解であるが、その継続として本論ではこのような近年の作品傾向を示すものとしてフィリピン系のザモラ・リンマーク (Zamora Linmark) の近作を取り上げて分析し、日本の植民統治という事項に関してどのような共通項が見出せるかを指摘したい。

4. 『レチュエ』にみる日本の植民統治の位置づけ

『レチュエ』(Leche, 2011) はリンマークの2作目の長編小説であり、2011年度に *Publisher's Weekly* の100冊の本に選ばれ一定の評価を得た作品である。これは、フィリピン生まれのアメリカ移民である主人公のアイデンティティ探しを主題とした、ある意味では非常にオーソドックスな移民の物語である。ただし、その表現と構造はきわめて斬新かつ複雑であり、日本植民統治に関する古くて新しい問題が重要なモチーフとして織り込まれている。そこで戦争の記憶はどのような位置づけになっているかを物語の分析から考えてみる。

『レチュエ』は、作家自身を投影した主人公、ハワイ在住のフィリピン系アメリカ人ヴィンス (Vince De Los Reyes) が1991年に故郷マニラを訪問して滞在する6、7日間の行動と心情の推移が主軸の物語である。ヴィンスは *Balibayan*、すなわち在外フィリピン人が故国に帰る「帰郷」の行為を通して多くの人間や出来事に遭遇し、次第に自分は誰か、マニラとは何かという、個人と国家のアイデンティティに思考をめぐらす。作品全体は、3人称の語りの部分にアメリカの家族友人に書き送る絵葉書、*Tourist Tips* (旅行者への助言)、悪夢という断章および写真などが挿入され、そこに歴史的地域的文化的な要素がガラクタのように散りばめられて多様な意味が付与される。その中から読者がまず理解するのは、ヴィンスが13年前にフィリピンから家族でアメリカへ出国したこと、現在は23歳でアメリカの大学を卒業し映像ディレクターとしてマニラで開催される映画祭に参加するために初めて帰郷したこと、マニラの名門政治家の一族で子ども時代の記憶が今なお鮮明に残っていることなどである。

当初彼は自分がアメリカ人だというアイデンティティを持っているが、次第に自分の内なるフィリピン人性に気づき始めて、自らのアイデンティティはどこにあるのかを探り始める。このアイデンティティ探しの中に、フィリピンの植民統治に関する歴史事項が織り込まれている。ま

ず冒頭近くで、日本の植民統治の最も過酷な部分が重要なモチーフとして登場する。それがマニラへの機内で上映される日本軍の従軍慰安婦をテーマとするフィリピン映画『恥の名のもとに』(In the Name of Shame¹⁶)であり、ヴィンスを含めた乗客が初めて観るものとして筋書きが詳細に紹介される。映画は、主人公のフィリピン女性が戦時中に妹たちの貞操を守るため、自らの身体を日本軍に提供した上にさらなる恐喝に屈して市長の娘たち50人を日本軍に慰安婦として受け渡したという過去に苦しみ、日本人の行為を世界に語らねばならないと最終的に公に告白するというものだ。この衝撃的な映画はストレートに日本を告発しており、それは通奏低音のように作品全体に響き渡る。ちなみに小説の舞台である1991年は、戦後46年を経てようやく慰安婦が名乗り出て大きな問題に発展した年である¹⁷。映画の後半、元慰安婦は日本に行って天皇に面会し、あなたの人民は過去について知る権利があると訴え、また日本人に向かって、広島は忘れないのにパターンは覚えていないのか、日本人だけが犠牲者というわけではないと叫ぶ。これもまた全編に響く作者の声となっている。さらに日本軍の過酷な行為の象徴のパターン行進も、ヴィンスが子ども時代に観たアメリカ映画や長年沈黙していた祖父の記憶に蘇った行進の実態を聞いた祖母の話を通じて、非難を込めて取り上げられている。

だが日本非難は、作品の主題でもなくまた単一の強いメッセージでもない。確かに機内映画は大きなインパクトを持つが、監督がマルコス批判映画を作成した経歴を持つことや¹⁸、主演女優がアキノ大統領の娘でアキノ暗殺事件がここから浮上するなど、フィリピンの最近の政治史が次々と批判的に取り上げられる。ヴィンスが出席する映画祭もマルコス夫人イメルダがかつて強引に開催したもので、ほかにもマルコス政権下で行われた多くのでたらめなことが過去の事実として示されるが、これらすべてはフィリピンの現在の混乱状況に引き継がれており、追い出したはずのイメルダが亡命先のハワイから帰国しそうだというとんでもない事態もこの時に起きそうな状況だとされる。ヴィンスが歴史地区イントラムロスを訪れた際のツアーガイドが、日本ばかりかアメリカもこの国を破壊したと説明するのは、作者の声にほかならない。たしかに日米がこの国の現在の混乱状況を生み出したわけであり、混乱状況下でフィリピンは出稼ぎと移民の大国となってしまったのである。一筋の希望であったアメリカへの頭脳流出者達さえ現実には肉体労働者に貶められるような嘆かわしい状況だということも、ツアーガイドの言葉で示される。

こうしたフィリピンの混乱した現状への批判や嘆きは、タイトル「レチェ」に象徴される。レチェは本来「牛乳」を表すスペイン語だが、現地俗語では精液その他きわどい意味をもつ。作品では具体的にはマニラにある架空のレチェという歴史的建造物を指し、そこはスペイン植民時には牛乳配布センター、アメリカ支配下で孤児院になり、日本統治期には帝国陸軍総本部として拷問や強姦が行われた場所である。先の慰安婦映画はここで撮影したという。いずれの時期にもその時の植民を象徴する機能を持ち、戦後、暗い記憶の場として放置されていたのをマルコスが修復し愛人を住ませたが、イメルダが追い出して歴史的価値を見出して美術館にしたという後日談まである。マルコス亡き現在、昼は美術館、夜はセックスクラブ兼バーという怪しげな場となっている。つまりここは今、フィリピンの表と裏の長い歴史、文化、社会が交錯する場なのだ。それゆえこの場所は、「どこから来たのかわからないフィリピン人は、どこへゆくのか決してわからない¹⁹。」というホセ・リサールの言葉と、フィリピン人は、みんなさまよえる民なのだ(306)というヴィンスの言葉に表われされている、混乱して迷えるフィリピン人のいわばルーツであり、批判も嘆きもすべてを飲み込む場所なのだと解釈できる。

それでは、この作品における日本統治の問題はどう位置付けられるだろうか。これを考える鍵

は、後半にある記憶に関する記述である。先のツアーガイドは、自らをフィリピン人、ヴィンスをアメリカ人と規定した上で、ヴィンスの考えを修正する。フィリピン人は、ヴィンスの言うように忘れやすいというのではなく過去を水に流すだけなのだ、しかし悲惨なことは全て記憶していて過去にこだわるから未来へ動き出せない、しかもその記憶は正確ではないしじかに経験していないこともあるが、逆にお互いをつなげる役割もすることがある、というのだ(255-256)。フィリピンの歴史記憶において日本占領は忘れられない重要なものだが、その抑圧は他の植民時代やマルコス独裁の記憶と折り重なる。若い世代のヴィンスは映画で慰安婦問題を知り、レチュエを訪れて慰安婦の苦悩や苦悶を自らの衝撃的な体験として感じ取る。こうして自らは体験していない日本植民統治の記憶を癒しがたい傷として受け継ぐ。その一方で、彼は自分が生まれ育った邸宅を訪れた時に、記憶にあった様々な家財一式がそこから一切なくなっていることを見て衝撃を受ける。自分がいたという確かな証拠はこの時点で曖昧になり、記憶は不確実となってしまう。これは自分がフィリピン人でもあると思っていたヴィンスに、そのアイデンティティ意識を揺らさせ、結果的には自らのアイデンティティはフィリピンにもアメリカにもあるのだと認識させることになる。こうして、日本の植民統治という個別の歴史事項は記憶のひとつとして、個人のアイデンティティに関わるかを示すものとされているのである。作品中、日本侵略は歴史事項としては最も詳細に描かれており、そこに作者の関心および批判は読み取れるが、文学の主要テーマはそれを絡めた別の部分だというわけである。

5. 結語

60年代以降のアジア系アメリカ人作家に見られる傾向をここで再度考えてみたい。先に指摘した様に、60年代以降の作家はストレートな非難、告発をしない傾向にある。だからといって日本侵略が問題ではないのではなく、問題視しているのは間違いない。そしてリンマークが『レチュエ』で展開したように、記憶との絡みで取り上げられることを多くの作家が試みている。たとえばすでに述べたように、シフーコが『イラストラード』で日本の残虐行為をいくつかのエピソードで断片的に語るの、いずれもフィリピン系アメリカ人が書いた幼児期の記憶を記した文章から浮上するような仕組みとなっている。これは歴史を客観的に叙述するのをあえて避ける技法であり、リンマークときわめて類似している手法だといえよう。そこで示されるのは二項対立の回避であり、勝者と敗者とか抑圧者と被抑圧者といった図式で歴史は捉えられないという考えのもとに、読者に歴史の評価をゆだねるという意図だ。シフーコもリンマークもフィリピン系としてお互いの作品を意識しており、それがこのような似た傾向を生じたと言えるかもしれない²⁰。しかしシンガポール系のサンディ・タンも『ブラック島』(*The Black Isle*)において、日本占領の歴史を込み入った手法で取り入れている²¹。この作品は、1920年代から80年代までのシンガポールを舞台とする歴史幽霊物語である。シンガポールにおいても日本占領は過酷な状況を展開したが、一人のシンガポール人女性がそれを80年代に東京で回想するという形式で語られる。中心となるのは、イギリス植民から日本占領を経て国家独立に至るまでの歴史を背景とした主人公のサバイバルの物語であり、植民の歴史は個人と国家の抑圧を表現している。そしてこの作品でも、国家と個人のアイデンティティの探求がテーマとなっており、そこに日本統治の歴史を絡めるという形を取っている。さらにグアムに目を向けると、クレイグ・ペレスも極めて複雑で難解な表現法を用いて植民を強く告発している²²。そのテーマもまた、喪失と剥奪にまみれた自国のアイデンティティの模索であり、それを先人の言葉、過去と現在の島の地図やチャモロの言語、祖父母

の断片的な証言などから構成する。読者はパッチワークのような作品からそのメッセージを読み取り構築することになる。

以上述べた文学の傾向からは、環太平洋アジア系の文学に通底する日本統治に関する類似した想像力の働きや表現を読み取れる。すなわち、若い世代の作家たちは日本の植民統治の犠牲者という枠組みを離れて、ポストコロニアル時代における国家の混乱を自己のアイデンティティと絡めて表現し、ポストモダンな手法などで読者に思考に加わることを要請する傾向を持つ。その問題意識は、なぜ故国はまだ混乱しているのか、なぜ悲惨な過去は清算出来ないのか、という簡単に答えが出ないところにある。戦争は遠い過去の話に思えても、じつは現在もお生き続けているという考え方が根底にあるからこそ、記憶という事項はきわめて重要なこととして浮上するわけである。もはやストレートに戦争を否定するとか非難告発するというのではなく、その重みを複層的に如何に伝えるかが文学の挑戦となっている。こうして過去の記憶を自己に引き寄せ如何に独自の形で表現するかが、アジア系アメリカ人作家にとって重い課題であるのは間違いない。筆者は、今後も日本人の評者としてこの分野を注視し新たな動向も見極めることを続けて行くと同時に、日本人にとっての加害の戦争記憶の重さも受け止めたいと考える。

※ 本研究は JSPS 科研費（基盤研究 (C)24520323）の助成を受けたものである。

¹ 本論文で「戦争」とは、特記していない場合には太平洋戦争を指すこととする。なお、「第二次世界大戦」はヨーロッパでの戦闘も含めた戦争を指すが、本論文が焦点を当てるのはアジア太平洋地域の戦争であるため、太平洋戦争という用語を用いる。

² たとえば朝日新聞は2016年8月15日終戦記念日に「老いる語り部 継承に苦悩」という記事をトップに掲げ、犠牲者の追悼と戦争の実態を伝える役割を担った戦禍の体験者が高齢化で撤退せざるをえない現状と、その継承の試みを報じている。

³ 河原崎（2016）は「忘れない/でも主張しないーシンガポールの華人社会」などのこれに関する新聞記事の指摘を取り上げた。

⁴ デイン・Q・レのインタビュー（朝日新聞、2015）参照。

⁵ テッサ・モーリス＝スズキ（『過去は死なないーメディア・記憶・歴史』2004）参照。

⁶ Marita, Sturken. *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*.(1997) 参照。

⁷ Fujitani, T. et al, "Introduction" *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s)*. pp.1-3.

⁸ たとえば Diana Wong は "Memory Suppression and Memory Production: The Japanese Occupation of Singapore" (*Perilous Memories: the Asia-Pacific War(s)*) において、シンガポールにおける日本の占領統治の記憶の欠落を鋭く指摘している。

⁹ *Transnational Asian American Literature: Sites and Transits* や *Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics* など時代と代表する Transnational を冠する評論書が多く出版されている。

¹⁰ Janet Hoskins & Viet Thanh Nguyen, ed.,(2014) 参照。

¹¹ Yunte Huang(2008) 参照。ホアンは現在カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授。

¹² Allan Punzalan Issac, *American Tropics: Articulating Filipino America*. Minneapolis, University of Minnesota Press (2006) 参照。

¹³ これは南北の回帰線に囲まれた島国で、はじめスペイン次にアメリカの植民地となった地域の共通性を取り上げた文学概念である。河原崎 (2010)(2012) 参照。

¹⁴ エレイン・キム (Elain Kim) のアジア系アメリカ文学の記念碑的な著書 *Asian American Literature* (1982) での項目は、如実にこの傾向を示している。

¹⁵ 河原崎 (2014) 参照。

¹⁶ あきらかにこのタイトルは実在のドキュメンタリー映画 *In the Name of the Emperor* (1998) をもじったものである。

¹⁷ リンマークはインタビューで1991年がフィリピンにとって極めて重要な年だと指摘する。ピナツボ火山の噴火で駐留米軍が撤退した歴史的事件が起きた年であり、日本統治関連ではこの年に慰安婦問題が浮上した。("Spotlight on: Leche by R. Zamora Linmark."(<http://coffeehousepress.org/blog-posts/spotlight-on-leche-by-r-zamora-linmark/>, 2016/8/13 閲覧) 参照)

¹⁸ この映画の監督 Bino Boca は、実在のフィリピンの有名な監督 Lino Brocka をモデルとしている。

¹⁹"A Filipino who does not know where he came from will never know where he is going." (336)

²⁰ リンマークは上記のインタビューにおいて、ヘゲドン、Bino Realuyo、シフコの名を挙げ、彼らの作品もマニラを舞台にするが自分は独自のマニラを描いたと述べている。

²¹ 河原崎 (2016) 参照。

²² 河原崎 (2012) 参照。

引用参考文献

- Brainard, Cecilia Manguerra. *When the Rainbow Goddess Wept*. University of Michigan Press, 1999.
- Cha, Teresa Hak Kyung Cha. *Dictée*. Tanam Press, 1982. (テレサ・ハッキョン・チャ、『ディクテ』池内靖子訳、青土社、2003.)
- Choi, Susan. *The Foreign Student*. New York: HarperCollins Publisher, 1998.
- Fujitani, T., White, Geoffrey M., Yoneyama, Lisa, eds. *Perilous Memories: The Asian-Pacific War(s)*. Durham & London: Duke University Press, 2001.
- Hagedorn, Jessica. *Dogeaters*. New York: Pantheon, 1990.
- Holthe, Tess Uriza. *When the Elephants Dance*. New York: Penguin Books, 2002.
- Hoskins, Janet & Nguyen, Viet Thanh, eds. *Transpacific Studies: Framing an Emerging Field*. Honolulu, University of Hawai'i Press, 2014.
- Howard, Chris Perez. *Mariquita: A Tragedy of Guam*. Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific, 1986.
- Hung, Yunte. *Ethnography, Translation, and Transpacific Displacement: Intertextual Travel in Twentieth-century American Literature*. Berkeley: California: University of California Press, 2002.
- _____, *Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics*. Cambridge: Massachusetts, Harvard University Press, 2008.
- Isaac, Allan Punzalan, *American Tropics: Articulating Filipino America*. Minneapolis, University of Minnesota Press, 2006.
- Jin, Ha. *Nanjing Requiem*. New York: Vintage Books, 2011.
- Keller, Nora Okja. *Comfort Woman*. New York: Viking Penguin, 1997.
- Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple University Press, 1982. (エレイン・キム『アジア系アメリカ文学—作品とその社会的枠組み』植木照代他訳、世界思想社、2002年.)
- Kim, Richard. *Lost Names: Scenes from a Korean Boyhood*. Berkeley: University of California Press, 1988.
- Lee, Chang-Rae, *A Gesture Life*. New York: Riverhead, 1999.
- Lee, Janice Y. K., *The Piano Teacher*. New York: Penguin Books, 2009.
- Lim, Shirley Geok-lin, et.al., ed., *Transnational Asian American Literature: Sites and Transits*. Philadelphia: Temple University Press, 2006.
- Linmark, Zamora. *Leche*. Minneapolis: Coffee House Press, 2011.
- Lum, Wing Tek. *The Nanjing Massacre: Poems*. Honolulu: Bamboo Ridge Press, 2012.
- Park, Therese. *A Gift of the Emperor*. Lincoln: iUniverse, Inc., 1997/2005.

- Perez, Craig Santos. *From UNINCORPORATED TERRITORY [HACHA]*.
Tinfish Press, 2008.
- SturkenMarita. *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*.
California: University of California Press, 1997.
- Taimanglo, Tanya Chargualaf. *Attitude 13: A Daughter of Guam's Collection of Short Stories*.
Bloomington: AuthorHouse, 2010.
- Tan, Amy. *The Kitchen God's Wife*. New York: Random House, 1991. (エイミ・タン『キッチン・ゴーズ・ワイフ』小沢瑞穂訳、角川書店、1992.)
- Tan, Sandi. *The Black Isle*. New York: Grand Central Publishing, 2012.
- Wong, Diana. 'Memory Suppression and Memory Production: The Japanese Occupation of Singapore'.
Perilous Memories: The Asian-Pacific War(s).
- 上林格「忘れないでも主張しない シンガポールの華人社会」朝日新聞 2015年9月1日.
- 河原崎やす子「『キューバを夢見て』にみるポストコロニアル・キューバー「回帰線」アメリカ文学からみる故国表象」岐阜聖徳学園大学外国語学部編『ポスト／コロニアルの諸相』彩流社、2010.
- _____、「グアムにおける植民地主義の告発—喪失と回復をめぐるチャモロの声—」『*AALA Journal* No.18』2012年
- _____、「フィリピン系文学にみる日本の植民統治—抑圧と抵抗のかたち」小林富久子監修『*憑依する過去*』金星堂、2014
- _____、「戦争文学として読むチャンネ・リーの『降伏せしもの』—「飢え」と「降伏」から見えるもの」『岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要』第54集、2015
- _____、「記憶される日本の東南アジア侵略—『ブラック島』にみる抑圧の歴史」『*多民族研究*』第9号、2016
- 木村司、岩崎生之助。「老いる語り部 継承に苦悩」朝日新聞 2016年8月15日.
- モーリス＝スズキ、テッサ。『*過去は死なない—メディア・記憶・歴史*』岩波書店、2004.
- _____、「突然の帝国解体、旧植民地と未清算の一因」朝日新聞、2016年8月27日3面.
- レ、デイン・Q。「アートで探るベトナム戦争 人々の声届けるプラットフォームに」朝日新聞 *Glove* 版、2015年9月6-19日：10-11.